Osaka University Knowledge Archive

Title	中村本『夜寝覚物語』最終場面の意味について : 改作本『寝覚』は＜幸福＞なる物語であるか
Author(s)	中川, 照将
Citation	詞林. 2003, 33, p. 29-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67498
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中村本『夜寝覚物語』最終場面の意味について

―改作本『寝覚』は〈幸福〉なる物語であるか―

中川　照将

一　はじめに

『夜の寝覚』には、二つの『寝覚』がある。一つは、原作本『寝覚』（平安期成立）であり、もう一つは、原作本をもとに作られた改作本『寝覚』（通称中村本、鎌倉～室町期成立）である。既に指摘されているように、これら二つの『寝覚』には、登場人物の設定や場面・心理描写の有無等々といった数多くの差異が認められる。[1] 特に第三部（原作本巻三、改作本巻五）以降の展開に関する差異は、「改作本作者の、原本に対する構想の意識的改変」[2]を示すものとして、ひいては享受層の拡大・好尚の変化に伴う物語の単純化・通俗化といった改作本全体の傾向を示すものとして捉えられている。

さて、ここで稿者が問題としたいのは、現在通説となっている［改作本＝〈幸福〉の物語］という捉え方である。従来より、これら二つの『寝覚』は［原作本＝悲恋→改作本＝幸福］といった図式のもとに捉えられるのが一般的であった。確かに、両『寝覚』の単純比較という面から判断するならば、こうした図式もあながち間違いとはいえないだろう。例えば、原作本第三部以降、男女両主人公を更なる《悲恋》へと導く原因ともなっている男君と朱雀院女一宮の結婚（中間欠巻部）が、改作本（巻三）では不成立に終わるものとして変更されている点などは、まさに［原作本＝悲恋→改作本＝幸福］という図式に当てはまるものとしてある。しかし、本稿が問題とするのは、そうした相対的な評価ではない。改作本『寝覚』それ自体が、〈幸福〉の物語としてあるか否かということなのである。事実、改作本『寝覚』を虚心に眺めていくと、そこには〈幸福〉の物語の一要素として捉えるには違和感を感じてしまうような、いくつもの《負》の要素が点在していることに気付くのである。

二　最終場面に仕組まれた《負》の要素

九条殿での逢瀬の後、数々の苦悩を重ねてきた両主人公

（男君・乙姫君）はついに結ばれ、二人の間に生まれた石山姫君も東宮に入内、やがて中宮となる。更に乙姫君にとっては継子である内侍督（故老関白長女）腹の若宮も東宮に即位する。次の引用は、こうした慶事が語られた直後の改作本『寝覚』最終場面である。

1きさきのみや（＝男君＋乙姫君第一子（石山姫君））は、いとちいさき御程に、たてまつれる御ぞのかさなりなど、かぎりあるわざなりければ、くれなゐのむつばかりにこうばいの五ゑのおり物、さくらのこうちき、給へる、いとたをやかに、はじめて見たてまつり給ふ人々をつゝましげに、御あうぎさしかくしてゐさせ給へるさま、たとへていはんかたなし。さばかりのとの（＝男君）、うへ（＝乙姫君）の御中よりいでおはしたる、おろかならんや。2うへはおとなしく、やなぎのかたもんの御ぞやつばかり、さくらのこうちき、もへぎのうちもの、からきぬ、あふぎなどもいたくさしかくさず、やはらかにもてなして、いざりいでたてまつるさま、いま見つけたらんやうにめづらかに見ゆ。3こ姫君（＝男君＋乙姫君第三子）は、こうばいのこくうすきおりもの、御ぞ、もえぎのおり物のうちき、かしこまりのために御もひきかけてゐ給へる、うつくしといはんかたなし。4わか君（＝男君＋乙姫君第四子）、ふりわけがみにて、5侍従の君（＝男君＋大君子息）うちつれてまいり給へる、いづれもらうたくみゆ。6とのも、もやのみすのもとにおはしまして、「みすのうちゆりぬ、ほゐなく」ときこえ給ふ御さま、ふりずいみじく見えさせ給ふ、うへ、すこしいざりいで給て、

（乙姫君歌）うれしとも思しらでややみなましうきにたへたるいのちなりせば

いふともなくまぎらはし給ふに、との、

（男君歌）思しるおりもありけりいのちこそうきにたへてもうれしかりけれ

かくて、との、うへさかへたのしみ給ふさま、むかしもためしすくなくぞありける。かやうに、夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍しとぞ。（巻五・五五六～七頁）

この場面の内容は、それほど難しいものではない。まず1后宮（石山姫君）の容姿と衣装が描かれ、次に2この物語の女主人公である上（乙姫君）の容姿と衣装、3小姫君の容姿と衣装、4若君と5侍従君の容姿、6男主人公である殿（男君）の容姿といったように、両主人公並びに彼らの係累にある人物の姿が描かれる。その後両主人公による喜びの唱和が描かれ、最後に「かやうに、夢はむなしからぬ事と、ありがたくぞ侍しとぞ」という言葉をもって物語が閉じられている。

従来より、この最終場面は、両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の大団円を描く場面として捉えられてきた。確かに、この場面に描かれる登場人物の姿は〈幸福〉の大団円に相応しい晴

れやかなものである。何よりも傍線部「かくて、との、うへさかへたのしみ給ふさま」云々の叙述は、両主人公の比類なき〈幸福〉を讃えるもの以外の何ものでもないかのように見える。しかし、実のところ、この場面は、両主人公の〈幸福〉を描かんとする場面としてあるわけではないのである。その理由は二つある。一つは、この場面には改作本『寝覚』における法則性という面から考えて、当然描かれていなければならない存在が描かれていないこと。もう一つは、この場面には、逆に、本来であれば描かれるはずのない、両主人公の〈幸福〉を阻止せんとする存在が描き出されているということにある。ならば、本来描かれていなければならない存在とは一体何か。両主人公の〈幸福〉を阻止せんとする存在とは何か。まずは、後者の両主人公の〈幸福〉を阻止せんとする存在について考えていくことにする。

三　〈幸福〉を阻止する存在としての老関白

この物語には、全体を通して両主人公の恋愛成就を阻む障害として存在せしめられている人物がいる。それは、女主人公乙姫君の先夫老関白である。

生前の老関白が、両主人公の恋愛において大きな障害としてあることは改めて述べるまでもないが、そうした障害としての機能は、死後においても同様に認めることができる。

①（乙姫君が）つきせぬ御なみだにむせび、ながめくらし給ふおりしも、（男君からの手紙を）御らんぜさすれば、（故老関白の）なきかげもはづかしく、そらおそろしくて、御返きこえにく、ておはするを、（女房たちが）とかくすゝめ申せば、……　（巻四・四九七頁）

②（乙姫君の）御心には、「この（＝故老関白死去の）御なごりの、とをくへだゝりすぎなば、わがこゝろのあさくおもひなるやうもあらん。身をかへても、あたりをさらじとおもへば、（男君が）そのかみのなごりわすれ給はずは、この御はての程ばかりは」とおぼして、うつゝのよゝりは、（故老関白の）かげおそろしくおぼえて、きこえ給はぬを、……　（巻四・五〇八頁）

これら二例は、いずれも老関白の死後、登場人物（乙姫君）が彼のことを思い出すという場面である。一例目は、老関白の死後、初めて男君が乙姫君のもとに手紙を贈った場面。ここでは、乙姫君が男君の手紙を手にした瞬間、老関白の亡き影（傍線部）を思いだし、そらおそろしく感じて男君への返事をためらってしまうさま（二重傍線部）が描き出されている。二例目は、男君が乙姫君に対面を迫る場面であるが、ここでも一例目と同様、乙姫君によって故老関白が想起され（傍線部）、男君への返事が憚られているさま（二重傍線部）が描かれていることがわかる。これら二例は、即ち老関白の存在が死後もなお乙姫君の心を呪縛し続け、男君との交流に障害を

生じさせていることを示しているが、こうした障害としての老関白の機能は、次の用例によってより明確になるだろう。

③十二月十日頃、雪いみじくふりつみたるに、……めのまへのあはれ、つねよりもたぐひなきに、（乙姫君は）むかし（＝故老関白）のなごりわすれにけるよとおぼししられて、ゆめの心地するに、日もはやくれゆくまゝに、つねよりもかきみだりくるしくて、物もおぼえ給はず。とのゝうちはいふにおよばず、よのさわぎなり。

（巻五・五三九～四〇頁）

これは、十二月十日頃の雪の夜、数々の苦難の末ようやく結ばれた男君と乙姫君の二人が、歌を交わす場面である。現在の〈幸福〉を実感する乙姫君は、またしても故老関白を思いだし（傍線部）、今度は重態に陥ってしまう（二重傍線部）。これは、後に物の怪として現れた故老関白の言葉からもわかるように、彼の両主人公に対する嫉妬故の仕業であった（巻五・五四二頁）。

ただし、結論から述べると、老関白は、前節で取り上げた最終場面とは無関係なものとしてある。なぜなら、障害としてある老関白の問題は、最終場面以前において既に解決されたものとなっているからである。例えば、先に触れた老関白が物の怪となって現れる場面では、すぐさま法性寺僧正によって、その物の怪が鎮められたことが語られている（巻五・五四二頁）。また別の場面では、

④（男君は乙姫君に対する）かぎりなき御心ざしのまさるにつけても、（故老関白の）御もの、けのいみじかりし事の給いで、さはなきあととても、うちとけおもふべくもあらぬ事かなと、わづらはしくおぼす。さばかりの御ひまなさにそへて、かの御とぶらひを、まことにありがたきまでおぼしいとなみ給けり。

（巻五・五四九頁）

とあるように、両主人公によって老関白の物の怪のことが話題に出された後、二重傍線部、彼らによって故老関白の霊が弔われているさまが描かれてもいる。加えていえば、右の④以降、老関白の物の怪が描かれることも、登場人物によって意識されるという場面も見あたらない。これらのことからも、老関白の問題が④の時点で完全に終結したものとして処理されていることは明白だろう。

以上、老関白という存在が、生前は勿論のこと、死後もなお両主人公の恋愛成就における障害として位置づけられていることを確認してきた。また、この事実が最終場面に仕組まれた問題（両主人公の〈幸福〉を阻止せんとする存在とは何か）と直接結びつくものではないことも、既に述べたとおりである。しかし、この事実は、確実に私たちを問題解決へと導くことになるであろう。ここで押さえておくべきは、老関白が障害として描かれていることではない。かつて乙姫君の夫であった人物が障害として描かれているということなのである。

四　〈幸福〉を阻止する存在としての大君

老関白は、乙姫君の夫であった人物である。その彼が、死後もなお両主人公の恋愛成就を阻む存在として描き続けられている。この事実は、必然的に次のような疑問を浮かび上がらせることになる。――両主人公のうち、他の人物と結婚していたのは、乙姫君だけでなかったはずではないか。――実は、これこそが、最終場面に仕組まれた問題に対する答えになる。両主人公の〈幸福〉を阻止せんとする存在とは、男君が乙姫君と結ばれる以前に結婚していた唯一の女性、乙姫君の姉故大君に他ならない。[3]

この結論には、様々な反論が想定されよう。生前の大君が、両主人公の恋愛成就を阻む大きな障害としてあったことは間違いないものの、死後の彼女に関しては、必ずしもそうした機能を担う人物として描かれているわけではないからである。大君は死後、登場人物によって想起されることがあっても、先の老関白の時のような「おそろし」といった感情を伴う存在として認識されているわけではない。また、彼女が死後、物の怪となって現れるという場面も見あたらない。[4]何よりも最終場面には、大君の存在そのものを認めることができないのである。しかし、ここで見逃してならないことが一つだけある。それは、最終場面には、大君の〈身代わり〉ともいうべき人物が描き出されているということである。その人物とは、大君と男君との間に生まれた若君である。

男君と大君の間に生まれた若君は、物語では「かたみの若君」と称されている。「かたみ」という言葉は、「亡き大君の形見」という意味である。この名称からも若君が彼女の影を引き継いでいることは明らかであるが、大君と形見若君の関係性は、名称のレベルだけに留まるものではない。形見若君の容姿に関する初出例、五十の祝いのために彼が老関白邸に移されるという場面には、

かたみのわか君の御いかは、（大君死去の）四十九日のうちにあたりたるを、（乙姫君）「いかでかは御いみのうちには」とて、そのようゐどもありて、とのゝ北御かた（＝乙姫君）よりむかへきこえ給ふを、大将どの（＝男君）は、「おぼしよるべくもなき事を」とかしこまりきこえ給て、（老関白邸に）わたしたてまつり給ふ。御めのとふたり御くるまみつばかりにてむかへたてまつりて見給ふに、（形見若君は）むかし（＝故大君）の御さまにいとように給たり。

（巻三・四七五頁）

とあり、形見若君が、容姿においても故大君の影を強く引き継ぐ存在として設定されていることがわかる。

形見若君を出産後、まもなく物語上から姿を消す大君。しかし、両主人公の恋愛成就を阻む存在としてある大君は、死後、その若君へと形を変えて、両主人公の前にあり続けているのである。

五　大君の〈身代わり〉としての形見若君

形見若君は、前節で触れた五十の祝いの場面以降、しばらくの間は、ほとんど言及されることがない。仮に言及されたとしても、

・大将殿（＝男君）は、あけ暮御きやうほとけの御いとなみにこそまぎれ給しに、いとけなきわか君（＝形見若君）ばかりを（故大君の）かたみにて、つくづくとおぼしつゞくるに、……かたみのわか君をば、（男君邸の）にしのたゐにすへたてまつりつゝ、なにのはゞかりなくすぐし給ふ。（巻三・四七六頁）

・（男君とともに広沢に）かたみのわかぎみおわすれば、（入道は）さりとも（故大君の）なごりなくはよもと、おぼすもしるく、……（巻三・四八四頁）

・十日ばかりひきさがりて、かたみのわか君わたり給へるをば、（男君邸の）にしのたゐにぞすへたてまつり給ふ。（巻四・四九七～八頁）

といった類の叙述に留まるのみである。しかし、物語が両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の結末へと一気に突き進まんとし始める巻五後半部、具体的にいえば男君が乙姫君を自分の屋敷に引き取る場面（巻五・五三〇頁）に至ると、それまで全くといってよいほど言及されることのなかった形見若君が、突然、クローズアップされていることに気付くのである。しかも、それら形見若君に関するほとんどの叙述が、彼に見られる、ある異常なまでの行動に関するものであることは注目されよう。

【二】かたみのわか君、（乙姫君が宮中から男君邸に退出した）きのふはいみ給べき日なりければ、けふ（男君と乙姫君のもとに）わたり給へり。よつばかりにて、御かたちありさまけだかくきよげなるを、（乙姫君はかつて）は、君（＝故大君）の、「とまる人あらば、人にゆづらず、おもへ」との給ひし事おぼしいで、あはれにて涙おち給ふ。（形見若君の）ものいひはいとうつくしくおよすけ、さがなくてしらぬ人ともおもはず、ふたり（＝男君と乙姫君）の御中にいりてなれむつれ給ふも、あはれにおぼす。（巻五・五三三頁）

これは、乙姫君が男君邸に引き取られた翌日の場面。形見若君は物忌みのため、一日遅れて両主人公のもとを訪れる。彼の「けだかくきよげ」な姿を前に、乙姫君は故大君の遺言を思い出し涙を流す。未だ幼い形見若君は両主人公の間に入り、そして「なれむつむ」。

稿者の述べるところの、形見若君の異常な行動とは、傍線部「ふたりの御中にいりてなれむつれ給ふ」というものである。一見、この彼の行動は、単なる子供故の無邪気さを示すものとしてのみあるかのように見える。少なくとも乙姫君には、そのように感じられていることだけは間違いないだろ

う。しかし、以下の用例を一つずつ辿っていくと、こうした彼の行動が、いささか常軌を逸したものとしてあることがわかってくる。

【二】ないしのかみ（＝故老関白長女）の（出産のため故老関白邸に）まかで給へるを、めづらしくおぼえ給て、みなさしつどひ、御物がたりなどつきすべくもあらず。かたみのわか君は、（乙姫君に）あやにくにしたひわたり給ふ。

（巻五・五三九頁）

【三】との（＝男君）は、此たびの姫君（＝男君＋乙姫君第三子）、御ふところをはなち給はず、いとかなしくし給ふ。うへ（＝乙姫君）も物のつゝましさ、すこしおぼしのどめて、はれ〴〵しくおきふし給ふに、かたみのわか君、（乙姫君に）あやにくにむつれ給へば、いとあはれにて、中〳〵我が御こよりもかなしくし給へば、（形見若君の）めのとなどもありがたき事におもへり。（巻五・五四六頁）

【四】れいのかたみのわか君、（乙姫君から）かた時もはなれ給はず。みや（＝内侍督（故老関白長女）若君）のいだかれ給へるをも、ふせかしげにおぼしたり。うへ（＝乙姫君は）うちゑみ給て、「しばし、このさがなものをこしらへ侍らん」とて、みやをば、さへもんのかみの北のかた（＝故老関白三女）いだきたてまつり給ふ。（巻五・五四八頁）

【二】【三】傍線部では、乙姫君から離れまいとする形見若君の行動が「あやにくなり」という言葉と結びつくものとしてあることが示されている。また、【四】では、そういった行動をとる彼が「さがなもの」とまで称されている。これらのことからも、彼の行動が、ある種異常なものとして位置づけられていることは明らかなのである。

何度も繰り返し言及される形見若君の異常なまでの行動。しかも、それが物語が両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の結末へと一気に突き進まんとし始める巻五後半部において、突然言及され始めたものであったことを思えば、もはや彼の行動が何を意味するものとしてあるか、その答えは明白である。——両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の阻止——この事実は、次に示す用例によって、より確実なものとして認められるだろう。

【五】えさらぬ事にて、（男君が）うちなどへまいり給ぬるひまには、かたみの若君（乙姫君に対して）いとなれまほしげに、ともすれば、御ぞひきあけてふしまつはれ給ふを、（乙姫君は）いとあはれにかなしくおぼ（え）給ふ。（形見若君は）おさなき御心にも、（乙姫君の）めでたき御さまを見しり給て、（乙姫君の）御あたりに、我よりほかはよせずとおぼしつゝ、ふせぎ給ふ、いとあはれ也。

（巻五・五三六～七頁）

男君が宮中に参上し「ひま」ができると、すぐさま乙姫君に近づき、傍線部「ともすれば（乙姫君の）御ぞひきあけてふしまつはれ」るといった、あたかも男女の情交を思わせるよう

な行動をとる形見若君。この彼の行動は、二重傍線部、乙姫君の「御あたり」には、自分以外誰もよせつけまいとする意識と結びついたものとしてある。つまり、形見若君の行動とは、表面的には叔母乙姫君に対する「子供故の無邪気さ」として描かれながらも、その内実は、乙姫君のもとに誰一人たりとも寄せつけない、ひいては乙姫君から男君を引き離し、彼女を独占せんとする欲望を潜在的に有するものとしてあったのである。

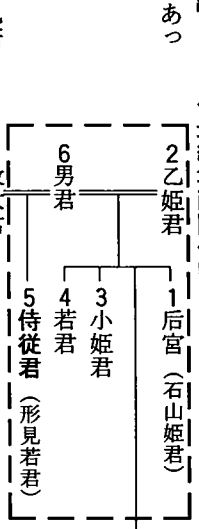
六　形見若君の欲望の顕在化

乙姫君から男君を引き離し、彼女を独占せんとする形見若君の潜在的な欲望。しかし、この物語において、彼の欲望が完全に達成されることはなかった。たとえ形見若君が、そうした欲望を有する存在としてあったにせよ、物語の範囲内において両主人公の関係が引き裂かれているわけではない。また、そのように捉え得る場面・叙述も存在しないのである。

しかし、彼の欲望は、確実に顕在化し始めている。事実、物語は、両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の大団円を描きつつも、同時に形見若君という存在によって、その〈幸福〉が阻止されつつあるさまをも浮かび上がらせている。そのさまが最も顕著に窺えるのが、本稿第二節で取り上げた改作本【寝覚】の最終場面なのである。

それでは、もう一度、最終場面を振り返っておこう。最終場面に描き出されている登場人物は、合計六人。順番に挙げていくと、1石山姫君、2乙姫君、3小姫君、4若君、5侍従君（形見若君）、6男君ということになる（左図参照）。

◆**最終場面関係図**



先に述べたように、この場面の問題点は二つある。一つは、本来ならばこの場面に描かれるべき存在が描かれていない点。もう一つは、逆に、本来ならば描かれるはずのない存在が描かれている点である。結論から述べると、本来ならば描かれるべき存在とは、両主人公の第二子真砂君（三位中将）であり、一方、描かれるはずのない存在というのが、これまで考察してきた形見若君（侍従君）になる。

この物語には、ある法則性ともいうべきものが存在する。その法則性とは、"両主人公の〈幸福〉なるさまが描かれる場面には、必ずといってよいほど両主人公とその二人の間に生

まれた子供たちが描かれる。それに対して、それ以外の子供（形見若君）は、同じ場所にありながらも、他の人物達とは一線を画する存在として無視される“というものである。

A 1との（＝男君）、2きたのかた（＝乙姫君）ならび給たるをみたてまつるにも、ことの（＝故老関白）、御もてなしは、たとし（へ）なくありがたかりしかど、との、御としたけ給たりしばかりは、かたなりしに、これは、月日のひかりをならべてみるこ、ちするに、えもいはずうつくしき3姫君（＝石山姫君）、4四ゐのせうしやうどの（＝真砂君）などもてなしかしづき給ふ、めでたしともいはんかたなし。

（巻五・五三四頁）

これは、乙姫君が宮中から男君邸に引き取られた翌日の場面。傍線部「めでたしともいはんかたなし」とあることからも、この場面が両主人公の〈幸福〉なるさまを描くものとしてあることは認められよう。この場面に描かれているのは、合計四人。1男君、2乙姫君、3石山姫君、4真砂君である。注目すべきは、4「四ゐのせうしやうどの」に続く、二重傍線部「など」という言葉である。なぜ、この「など」という言葉が問題になるか。その理由は、次の叙述に隠されている。

かたみのわか君、（乙姫君が宮中から男君邸に退出した）きのふはいみ給ふべき日なりければ、けふ（両主人公のもとに）わたり給へり。

（巻五・五三三頁）

つまり、両主人公とその子供たちが集まっているこの場には、形見若君も同席していたはずなのである。それにも関わらず、形見若君の名前が挙げられることはなく、ただ「など」という言葉で処理されてしまっているのである。

次の用例は、十二月十日頃、雪山を眺めながら語り合う両主人公の姿が描かれる場面。

B十二月十日頃、雪いみじくふりつみたるに、1姫君（＝石山姫君）の御方には、2四ゐの少将（＝真砂君）などまいり給て、ゆき山つくらせて、ねうばうなどあそびけるを御覧じて、3ふたところ（男君・乙姫君）ながめいだしておはす。

（巻五・五三九頁）

この場面に描かれているのは、1石山姫君、2真砂君、3「ふたところ」（男君・乙姫君）の合計四人であり、ここでも形見若君の存在は確認できない。ただ、乙姫君から離れようとしない存在として描かれていたはずの形見若君が、なぜ、この場面に描かれていないのかは問題となるであろう。あるいは、この場面でも、彼は二重傍線部「など」という言葉によって処理されているのかもしれない。

次は、石山姫君の裳儀の記事に続く、八月十五夜の合奏の場面である。

C（八月）十五夜の月すみわたりて、いとおもしろきに、……みすのまへにて御あそびありけるつゐでに、（男君は）むかし、みやのさいしやうの中将のそうしたりけるびわのねのこと、きこしめしをきたりければ、ゆかしく

おぼしめして、（乙姫君に）あながちにすゝめ給へば、はぢあひ給ふべくもあらぬ御事にて、**1姫君**（＝石山姫君）にさうのこと、**2うへ**（＝乙姫君）にびわ、**3ちうぐうの御**まへにわごんまいりて、**4四ゐのせうしやう**（＝真砂君）、いまは三位中将にて、よこぶえをふき給ふ。**5たいふ**（＝宮大夫）さうのふえ、**5との**（＝男君）ひやうしうち給て、……　（巻五・五五一～二頁）

この合奏に参加しているのは、1石山姫君、2乙姫君、3中宮、4真砂君、5宮大夫、6男君の計六人。この合奏に関しても中心となっているのは、両主人公と彼らの子供達であり、形見若君は参加していないことが確認される。ただ、この合奏には3中宮だけでなく、5宮大夫までもが参加しているとあるにも関わらず、形見若君はその名前さえも示されていないことは留意すべきであろう。

最後に、乙姫君が四人目の子供を妊娠し、その安産祈願のために石山詣でをする場面では、

D十月なかの十日のほどに、かんだちめ、てん上人などあまた**1**（男君と乙姫君の）御ともにまいり給ふ。めづらかにありがたき見ものにてぞありける。**2三位の中将どの**（＝真砂君）、かぎりなくかしづきたてられて、ひかりさしそふこゝちしけり。**3こわか君**（＝第三子）は、との（＝男君）、御車にたてまつらせ給へり。　（巻五・五五三頁）

とあるように、1男君と乙姫君の石山詣でに、2真砂君、3両主人公の第三子小若君が伴ったことが示されている。しかし、この場面においても、形見若君については全く言及されていない。

以上のように、この物語には、"両主人公の〈幸福〉なるさまが描かれる場面には、必ずといってよいほど両主人公とその子供達が描かれるのに対して、形見若君だけは絶対に描かれない"という法則性が存在していることが確認できる。少なくとも、形見若君が両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の大団円とは関わらない存在として位置づけられていることだけは間違いないだろう。[5] しかし、それにも関わらず、最終場面には、異分子としてあるはずの形見若君が描かれている。しかも、彼が、本来ならば描かれるべき両主人公の子息（真砂君）と入れ替わる形で描かれていることを思えば、最終場面に形見若君が描かれていることの意味は、ますます大きなものとなってくるであろう。

従来より両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の大団円を描くものとして捉えられてきた改作本『寝覚』の最終場面。しかし、そこに描かれているのは、完璧なる〈幸福〉ではない。最終場面とは、両主人公の恋愛成就・〈幸福〉を阻止せんとする形見若君が、両主人公を中心とする輪の中に何事もなかったかのように入り込んでいる場面。更に言えば、乙姫君から男君を引き離し、彼女を独占せんとする形見若君の潜在的な欲望が、真砂君（三位中将）の排除という形で顕在化し始めている

場面。つまり、そこに描かれているのは、両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の大団円が、今まさに形見若君によって破壊されようとしているさまなのである。[6]

七　おわりに

これまでの考察結果からも明らかなように、この物語には、いくつもの《負》の要素が点在している。男君の先妻大君の存在、その〈身代わり〉としてある形見若君、彼によってなされる真砂君の排除などがそれである。しかし、この物語における最も大きな《負》の要素は、両主人公が、それらの《負》の要素に全く気付いていないということなのである。

形見若君が大君の〈身代わり〉としてあることは紛うことなき事実であり、両主人公もそのこと自体は、十分認識していたはずである。しかし、彼らは、形見若君が大君の〈身代わり〉としてあることの真の意味を理解していない。両主人公の恋愛成就・〈幸福〉の障害としてあった老関白と大君（＝形見若君）のうち、大君（＝形見若君）のみが最後まであり続けている理由も、実はそこにある。乙姫君は、求められるがままに形見若君を抱きしめ、最終場面においては、彼を自分たちの和の中に暖かく迎え入れている。このことが、最終場面ひいては改作本『寝覚』に仕組まれている《負》の要素を、より鮮明に浮かび上がらせているのである。

果たして改作本『寝覚』は〈幸福〉の物語であるか。答えは否である。改作本『寝覚』は、〈幸福〉の物語でも、〈幸福〉の物語として作り替えられたものでもない。そこに描かれているのは、原作本とは全く異なる、新たな《悲恋》の物語なのである。

注

(1) 鈴木弘道『平安末期物語の研究』（初音書房　一九六〇）
永井和子『寝覚物語の研究』（笠間書院　一九六八）
同『続寝覚物語の研究』（笠間書院　一九九〇）等。

(2) 松尾聡「よはのねざめの物語」（『平安時代物語の研究第一部―散逸物語四十六篇の形態復元に関する試論―』東宝書房　一九五五）

(3) 老関白と大君の二人は、結婚以後、常に両主人公の関係に苦しみ続け、また物語半ばで死去するという共通点を有している。しかも、改作本が、原作本において成立していたはずの男君と朱雀院女一宮の結婚を不成立なものへと変更していることを考慮するならば、老関白と大君の対関係は、ますます強固なものとして認められるだろう。

(4) ちなみに男君と女一宮の結婚が成立している原作本（新編日本古典文学全集）では、病床中の女一宮のもとに「故上（＝故大君）の御けはひとおぼゆる」物の怪が現れている（巻四・三八二頁）。

(5) 大君遺児形見若君（男）は、原作本では「小姫君」（女）として登場している。原作本（女）→改作本（男）の改変とその意味については、

長谷川和子「寝覚『小姫君』考」（「学習院大学国語国文学会誌」一一九五六・一）
北川大成「よるのねざめ（中村本）―小姫君に関連して―」（「愛知学芸大学紫水会会報」三　一九五六・二）
種本節子「中村本「夜寝覚物語の改作態度―人物の改変についての一考察―」（「語文」二一　一九五八・一二）
等をはじめ、近年では、
渡辺純子「改作本『夜寝覚物語』論―源氏太政大臣子女の系図改変をめぐって―」（「古代文学研究　第二次」八　一九九九・一〇）
に考察がなされているが、その結論は、すべて［原作本＝悲恋→改作本＝幸福］の範疇に留まるものであったとおぼしい。しかし、本文で述べているように、形見若君は、両主人公の〈幸福〉を保証するものとはなっていない。少なくとも、原作本（女）→改作本（男）の改変が、両主人公の〈幸福〉の実現とは結びつかないものとしてあるということだけは言えるのではなかろうか。

(6) 乙姫君から男君を引き離さんとする形見若君の潜在的欲望が、なぜ、他の誰でもない、真砂君（三位中将）の排除という形で顕在化しているのか。その理由は、次のことからも明らかである。この物語において、真砂君は、男君の影を強く引き継ぐ唯一の人物としてある。例えば、彼の出生の場面には、

・七月つゐたちごろに、あるかなきかにきえいるやうにて、たまひかるやうなるおのこゞ（＝真砂君）、むまれ給ひぬ。大将どの（＝老関白）、「さればよ、まぎるべうもあらぬ程かな。人いかにき、おもふらん」　（巻二・四三八頁）

・大将殿（＝老関白）は、こうへの御はらに姫君三人ばかりおはしければ、昔よりおとこのおはせぬを、くちをしくおぼしたるに、なべてならぬわか君（＝真砂君）のうつくしさ、大なごんどの（＝男君）にたがひ給はねば、……　（巻二・四三九頁）

とあり、以後［男君＝真砂君］という設定は変わらない。つまり、真砂君（三位中将）は、男君の〈身代わり〉として最終場面から排除されているのである。

※引用本文は『鎌倉時代物語集成六』による。なお、引用本文中の（　）内の注記や傍線等は全て私に付したものである。

（なかがわ・てるまさ　本学大学院研究生）